域活動を目的とした外出が少ないことが、女性は目的を問わず 1 週間の外出頻度が少ないことが、主観的健康感が低いことと関連していた。

**P3-35.**
**脊椎外科における術後早期再手術と医療安全**

（整形外科）
○遠藤　健司、松岡　佑嗣、高松太一郎
村田　寿馬、関　　健、上原　太郎
鈴木　秀和、粟飯原孝人、西村　浩輔
山本　謙吾

【はじめに】 脊椎外科における周術期合併症は、5% から 9% に発生し（JNS2016, JSR 2013）、永続的障害を残すことがあるため、その予防と対策は重要である。近年、医療安全に関する社会的関心が高まる中、各診療場面における医療安全の客観的医学データを構築することが望まれる。今回、周術期に複数回手術が必要となった症例を検討し、脊椎外科における医療安全と当科の取り組みについて報告する。
【対象、方法】 対象は 2012 年から 2017 年まで行われた脊椎手術 1,455 例（平均 242.5 例/年）男性 845 例、女性 570 例、平均年齢 61.1±16.6 歳で、計画的複数回手術を除き、術後 2 か月以内に再手術を行った症例を検討した。
【結果】 2012 年から 2017 年までの術後周術期再手術は、39 例（2.7%）で男性 10 例、女性 29 例、平均年齢 63.8±15.9 歳であった。内訳は感染 25 例（1.7%）、血腫 5 例（0.3%）、髄液漏 5 例（0.3%）、スクリュー脱転 2 例（0.3%）、早期隣接椎間障害 2 例（0.3%）であった。
【考察】 脊椎周術期合併症の中でも、早期再手術を要する原因は、感染、血腫などによる神経障害発生に関与する要因が多かった。米国における調査では、腰椎術後合併症による 30 日以内の予期せぬ再入院の発生は、4.4% で創部感染が多かったとの報告があるが（Spine 2014）、当科においても創部深部感染が多く、感染に対する対策が特に重要であると考えられた。また、スクリュー脱転の原因として現在使用している X 線透視機器での操作の限界がありナビゲーションシステムの早期導入が望まれる。合併症に関する学会発表、論文作成の他、医療安全向上の対策として 2017 年より、科内グループ間の相互手術監査、術前のリスク評価、インシデント発生後のカンファ、多施設での脊椎専門家による医療安全カンファを開始した。

**P3-36.**
**e ポートフォリオを用いた全科共通臨床実習日誌の活用状況について**

（医学教育学）
○油川ひとみ、Breugelmans Raoul
（医学教育推進センター）
山科　　章、三苫　　博
（耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
清水　　顕

【背景と目的】 e ポートフォリオを臨床実習の日誌として平成 27 年 4 月より医学科第 5 学年の臨床実習において、振り返りと教員からのフィードバックを行う活動を開始した。当初は、循環器内科学、産科婦人科学、救急・災害医学の 3 診療科のみであったが、翌年には耳鼻咽喉科・頭頸部外科、臨床検査医学、腎臓内科などが参加し、平成 29 年度からは、学生からの要望と教員の情報共有という観点から原則全診療科共通で使用可能とした。全科使用可能となって 1 年が経過し、平成 29 年度からは臨床実習の開始が第 4 学年の 1 月となったため、第 5 学年の 1 年間と第 4 学年の 4 か月間の使用状況について調査を行った。また、平成 28 年度耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌のテキストマイニングを行い、e ポートフォリオから得られる情報について紹介する。
【方法】 学生の振り返りと担当教員からのフィードバックを診療科ごとに比較した。また、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌をテキストマイニングした。
【結果】 学生の書き込み数は、教員からのフィードバック数に比例していた。また、フィードバックの方法は、一人の教員が担当する場合、複数の教員が交代で行う場合、複数の教員が同時に行う場合など、それぞれの診療科の指導体制で異なっていた。活発に指導が行われている例として、平成 28 年度耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌をテキストマイニングした結果、e ポートフォリオの振り返りから、実習で学生の印象に残った内容および学生が実習中にいだく気持ちが読み取れることが分かった。

【結語】 e ポートフォリオを用いた日誌による振り返りと教員からのフィードバックによる指導を全科共通で開始して 1 年が経過した。診療科によって使用方法および内容は異なるが、指導があれば学生は積極的に使用している様子が分かった。また、日誌の中には実習内容および学生の気持ちが記されることが多く、ひとりひとりにそった指導への可能性が見えてきた。

**P3-37.**

## 大学院生における研究環境の現状

（医師・学生・研究者支援センター）
〇須藤カツ子、大久保ゆかり、持田　澄子
　天野　栄子、荻野　令子
（病態生理学）
　林　由起子
（公衆衛生学）
　小田切優子
（医学総合研究所）
　中島　利博、荒谷　聡子
（産科・婦人科）
　西　　洋孝
（腎臓内科）
　長井　美穂
（呼吸器外科・甲状腺外科）
　矢野由希子
（分子病理学）
　真村　瑞子
（人体病理学）
　原　由紀子
（救命救急センター）
　河井健太郎

医師・学生・研究者支援センターでは本学の大学院生の現状を把握する目的で、大学院生を対象としたアンケート調査を平成 29 年に実施した。アンケート対象者数 226 人、回収率 30.5%（有効回答数 66、無効回答数 3）で必ずしも大学院生の現状を確実に反映しているとは言いがたいが、何らかの傾向が掴めるものと考え解析をしてみた。調査の結果、博士課程の 75% が社会人大学院に所属し、医師・歯科医師が社会人大学院生の 78% を占めた（他は薬剤師、記載無し、資格無しが 22%）。そこで今回は医師で社会人大学院博士課程院生の研究活動について報告する。

社会人大学院生の医師は男性 66%、女性 34% で構成され、男性の 57% が大学病院に、女性の 55% が大学に勤務し、男性の半数は助教、女性の半数は後期臨床研修医であった。これはアンケート回答者の男性の 33% が 4 年生に対し、女性の 4 年生は 18% である事に起因していると思われる。

研究のための指導について男性医師、女性医師ともに 84% 以上で十分に指導されている事がうかがえた。研究時間の有無をたずねたところ十分ある・少しあると回答した男性は 67%、女性は 54% であった。あると回答した院生の研究時間は共に 1〜3 時間で、1 週間の研究日数は 1〜3 日であった。研究時間がほとんど無い・全くないと回答した院生が必要とする研究時間は男性で 1〜6 時間、女性で 2〜5 時間、日数は共に 1〜3 日であった。研究テーマについての自由度は男女とも 80% 以上で自由度ありと回答している。平成 28 年度の業績は男性の 71%、女性の 45% が日本語で、男性の 28%、女性の 9% は英語で学会発表しており、男性の 14%、女性の 27% が日本語の、男性の 33% が英語の筆頭著者論文を 1 編以上発表していた。

学位取得後についての質問で取得後も『臨床と研究を継続したい』と回答したのは男性 59% に対し、女性は 27% にとどまっていた。女性の 37% が『学位取得後は臨床に専念したい』との回答であった。

**P3-38.**

## e 自主自学を用いた客観的自己評価プログラムの実践

（産科婦人科学）
〇野平　知良
（医学教育学）
　油川ひとみ

【目的】 自分を客観的に評価することは医師の自律的学習能力獲得に必須である。我々は臨床実習における症例プレゼンテーションの際に moodle の「ワークショップ」上で自己評価を含む学生間相互評価を実施してきた。今回我々は昨年 1 年間の「自己評価プログラム」の結果を用いて、学生の自己評価の特性とプログラムによる意識変化を検討した。